

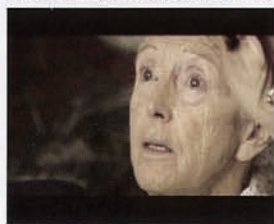


NEW CREATOR in the world

世界の広告界の次代を担うのは一体誰なのか？
近年世界の広告界でも新しい声が増しているのが、新興国と称される国々のクリエイターです。経済が成長する国は、クリエイティブにも新しい動きがあります。この企画では、こうした新興国のクリエイターを中心に、活躍の広告クリエイターを5人ピックアップし、世界で活躍するクリエイターは、何を考え、どんな仕事を手がけているのか？ 所属するコメントと共に、ご紹介します。



ネスレ フリスキー 屋外広告「Birds」(レオバーネット・リスボン) 看板の上部に商品である鳥の餌が入っている。



児童福祉機関 テレビCM「Alzheimer」篇 (レオバーネット・リスボン)



FIAT テレビCM「The Mascherano Case」篇 (レオバーネット・アルゼンチン)



アルゼンチン赤十字社 屋外広告「Flooded House」(レオバーネット・アルゼンチン)



フェルナンド・ベロツティ
レオバーネット・アルゼンチン社長・レオバーネット・ワールドワイド・クリエイティブ・ホドメンプー、オズワルド・アンド・メイザーに就任した後、エージェンシーでキャリアを積み、レオバーネット・リスボンのCEOを経て現職。

RECOMMENDATION

アルゼンチンのクリエイティブブームが世界から注目されています。ベルリンスクールオブ・クリエイティブ・リーダーシップ・アカデミー (2004-08) の卒業生であるフェルナンド・ベロツティは第二次世界大戦後以来と知られていますが、いずれ世界より活躍するクリエイティブ・ディレクターになるでしょう。チリ、ボルトガルでCDとして経験を積み、現職は助成であるアルゼンチン・ハウスに就任しています。人の気持ち、物の本質を直感で捉え、表現する能力には目を奪われるばかりです。(70年代のCD 中山幸夫氏)

フェルナンド・ベロツティ Fernando Bellotti

活動の場を覚え続け 自分自身を成長させる

現在レオバーネット・アルゼンチンの社長を務めるフェルナンド・ベロツティさんが広告業界を志したのは、8歳のとき。「学校の先生が作文をほめてくれたんです。『これは素晴らしい！あなたは書く勉強をもっとするといわね！』ってね。その言葉通り、ブエノスアイレスのオズワルド・アンド・メイザーにコピーライターとして就職し、7年後マクヤンに転職した。

さらに、アルゼンチンの危機的な社会情勢もあり、2002年チリに活動拠点を移した。そして2年後にはレオバーネットに転職、ボルトガルに赴任した。「この時期こそが私のキャリアの中でハイライトと呼べる時期です。カンパニーで多くの賞を受賞し、2年あまりで世界の広告賞のほぼ全てを受賞しました。しかし何より大事なのは受賞の事実ではなく、誇りも自分自身もとても楽しんで仕事をしていったということです。07年にアルゼンチンに戻り、現地のレオ-

バーネット社長に就任。「エージェンシー全体をリードする立場になり、仕事は大きく変わりました。クリエイティブで評価を得られるまで2年の時間を要しましたが、私は今自信を持ってレオバーネット・アルゼンチンを理想の業にできたと言えます。自身の手掛ける広告について、「私の作品はすべて真実を語っています」とフェルナンドさんは言う。代表作の一つであるテレビCM「Alzheimer (アルツハイマー)」では、認知症の老人を通じ、被災者が人の心に一生の傷を負わせることを描いた。また、洪水被害に遭った地域への支援を呼びかける「Flooded House (水没した家)」は、公園の池に水をためることで、洪水の被害をストリートに見る人に訴えた。真実をベースに誠実に語ることで、人々の心を動かす訴求力を生むと信じている。

広告クリエイティブの仕事は意のままにならないことも多く、常に不安や心配が訪れます。だが「真にクリエイティブなことが起こるのは、人々が心から楽しんでい

るとき、ハッピーな気持ちからこそ、良い作品が生まれる」と前向きな姿勢こそが打撃になると思える。逆に、広告業界最大の欠点は、自分たちを自身のアイデアの中に閉じ込め、誇りの世界を見ないことだという。「アイデアは別の世界から生まれる。我々は自分たちでできること、できないことに目を立てたりますが、目を外に向け、もっともっと楽しむべきです」。

2年前、初めて日本を訪れた。「良い意味でもとても驚きました。あらゆる面でアルゼンチンと正反対。日本では人々は相手を敬い、良い聞き手となり、互いに誇りします。これはアルゼンチンの人々とは逆の性質です。しかし、日本人は批判することに慣れておらず、実感が起こりにくいと感じました。大きな変化を求めるならば、日本を離れ、世界に出て行くことが最善の道という。「世界の世界から外に出ることは、考え方を大きく変え、成長させてくれます。私自身、ボルトガル、チリ、ドイツにて経験を積み、それを実感しています」。